

## 「関わり」を作る

10月は秋を感じる季節ですがまだまだ暑さが続き衣替えどころではありません。早く涼しくなってほしいものです。経営は「関わり」を作る仕事です、関わる人を増やし、関わる人との関係をより良く築いて行くこと、それが経営です。この「関わり」を構築していく上で絶対欠かせない力があります。それは「コミュニケーション力」です、自分の想いを人に伝達する力、人の想いを受け取る力、この力が絶対必要です。苦手だからと逃げてはいけません。この自分の想いをたくさんの方と関わって共有できるよう頑張っていきたいと思えます。



## 心のシャッターをあける

部下やお客さんが仕事をうまく進めるためには、十分な情報を持っていることが重要です。しかし、自分の中に思いや考えがあっても、それがなかなか口にされることはありません。では、どのようにして人々の発見を促すことができるでしょうか？人と人が向かい合うと、摩擦が生じることがあります。人は基本的に自分以外の人間に対して防衛的になります。厚いシャッターが下がったままで、相手があなたを協力者として選ぶことはありません。協力者として選ばれる第一歩は、シャッターを少しでも上げることです。日頃から「おはよう」や「ありがとう」といった当たり前の一言に、どれだけ気持ちを込めることができるかで、シャッターの上り変化します。向かい合って初めて重く閉ざしたシャッターに手をかけるのでは遅すぎます。そして、発見を促すための質問をします。ひとつの答えを受け取ったら、それを相手に伝えましょう。「そうなんだね」「そんなふうに考えていたんだね」といった言葉で、相手を自由にさせてください。「それで」「それから」と続けて話を聞いていくことで、関心が生まれ、さらなる質問が生まれます。この過程を繰り返すことで、相手は徐々にあなたを探索の伴走者として認め、実際に発見が促されていくでしょう。



## ありがとうございます

コンビニで買物をして最近感じるがあります。レジでの支払いが自動化になり「ありがとうございました」と言う言葉が聞けなくなったように思えます、スタッフさんとお客様との会話も減って、笑顔での対応がなくなったような気がします。そんな中、私は必ずお金を払って品物を頂いたら、頭を下げて笑顔で「ありがとうございました」と言うようにしています。最初は何か変なおじさん？という感じでしたが、最近いつも行くコンビニで、レジの方から笑顔の挨拶が返ってくるようになりました。「ありがとう」の挨拶から大きな効果が現れたと思えました。感謝の言葉は、受ける人よりも伝える側の方に大きな効果があるという結果があります。

1. 健康に好影響
2. 幸福度が高まる
3. ポジティブになる
4. 社会に好影響



これからも、自分が接した人には必ず「ありがとうございます」と伝えて、人と繋がって行きたいと思えます。この出来事で自分の心が豊かになり変わったような気がします。彩花のスタッフも、この「ありがとう」を交わして良い環境を作っていきたいと思えます。



## たらいの水の原理

人間は皆、空っぽのたらいのような状態で生まれてくる。つまり最初は財産も能力も何も持たずに生まれてくる。



そしてそのたらいに自然やたくさんの人たちが水を満たしてくれる。

その水のありがたさに気づいた人だけが他人にもあげたくなり、誰かに幸せになってほしいと感じて水を相手のほうに押しやろうとする。

そして幸せというのは、自分はもう要りませんと他人に譲ってもまた戻ってくるし、絶対に自分から離れないものだけれど、その水を自分のものだと考えたり、水を満たしてもらおうことを当たり前と錯覚して、足りない足りない、もっともっととかき集めようとする、幸せが逃げていく。

…二宮尊徳言葉から

「たらい」に水が満たされている幸せに先ず気付き、感謝と喜びの心を持つことで人生をより豊かにできると言われています。

# センドシオイ

## ■2つの祭事

糸島市の芥屋では毎年9月1日、「千度汐井」と「風止め相撲」の2つの祭事が行われます。

芥屋の地租である大祖神社とその境内に隣接する土俵が舞台です。「千度汐井」は、海岸で集めた小石千個を奉納し（本殿に向かって二礼二拍一礼する）、

五穀豊穡と諸災解除を祈るというものです。

鳥居の手前に用意された小石を、一個ずつ奉納するというを一人20回程度繰り返し、1時間くらいで祭事は終了します。「なかなか石が減らんねえ」とか

「しっかりお参りせなねえ」「最近どげんしょっとね」とか他愛のない会話を交わしながら、和気あいあいとした時を過ごします。



「千度汐井」

## ■共同性につつまれてこそ

「風止め相撲」のほうは秋の収穫に先立ち、“糸島名物”の強風で収穫前の作物が痛まないよう祈願し、相撲を奉納するというもの。この一年に生まれた男児の健やかな成長を祝う祭事です（成人相撲は数年前になくなりました）。かわいい化粧まわしに紅白はちまき姿の5人の男児が、青年力士（独身であることが条件）に抱かれて、次つぎに土俵入りしていきました。

どちらも百年二百年と続いてきた伝統行事ですが、地域（かつては村）の諸災解除を“共同”で祈願し、子どもたちの育ちを家単位でなく、地域の宝として地域全体で祈願するという点で共通しています。こうした地域文化に小さい頃からふれることで、共同体構成員としての帰属意識やアイデンティティが培われてきたのでした。



「風止め相撲」

## ■暮らしを支える毛細血管

残念なことに都市部のみならず旧集落においても、地域的な絆と共同性（つながりと関わりのもとで生きていくこと）を紡いできた伝統行事は急速にすたれつつあります。他方で、情報化やデジタル化、高齢化、人口減がすすむなかで、「地域に暮らす」ことの意味が改めて問われているように思います。いくら都市化・近代化がすすみ、お金があっても人間ひとりじゃ生きていけません。ご近所での良好な人間関係や、日々の暮らしを支える医療、介護、買物、交通などのサービスが毛細血管のように張りめぐらされてこそ、充実した人生につながっていくのではないのでしょうか。

## ■地域も経営でできている

こんなことを考えると、現代社会において「暮らしの根っこは地域にあり」ということを見つめ直す必要があります。先の千度汐井は千の石を奉納することで、地域共同の大切さを伝承してきたのでした。個人の祈願は「お百度参り」ということで100回で済みますが、地域のつながりや関わりを再生し、維持していくためには桁違い（1000回）の努力が求められます。

今号オモテ面の冒頭コラムは「経営は“関わり”を作る仕事」となっています。その表現を借りると「地域活性化は“関わり”を作る仕事」「地域も経営でできている」と言えなくもありません。みんなが地域という人生舞台の共同経営者として、“ありがとう”といったちょっとした声のかけ合い等を起点に、ゼロからの“つながり”づくりを実践していくことで未来の展望が開けそうです。（らく）

